

表題：第2回瑞穂町の協働を考える会議 概要

- 1 日 時 平成25年6月19日（水曜日） 18時00分から19時55分
- 2 場 所 役場庁舎2階会議室
- 3 出席者 （構成員） ※敬称略
飯田弘、榎本和己、加戸佐織、香取幸子、川口尊、古宮郁夫、清水久央、
中沢清、野本多恵子
（事務局）
住民部長田辺健、地域課長大井克己、地域課地域係長友野裕之、
地域課地域係主任福島聡
- 4 欠席者 近藤隆幸
- 5 議 題
 - 1 正副座長の互選
 - 2 （仮称）瑞穂町協働宣言の策定について
 - 3 協働宣言の策定に向けた自由討議
 - 4 その他
- 6 配付資料
 - 1 次第
 - 2 協働について
 - 3 （仮称）瑞穂町協働宣言について
 - 4 参考資料（津島市市民協働宣言）
 - 5 第4次長期総合計画

議題1 正副座長の互選

座長に飯田弘氏、副座長に加戸沙織氏に就任いただきました。

2 （仮称）瑞穂町協働宣言の策定について

事務局から、協働宣言とはどのようなものか、どのような形のものをつくるのかについて説明しました。

3 協働宣言の策定に向けた自由討議

第1回目ということで、各自が考える協働とは何か、現在活動している中で感じたことや各活動団体に対して思うことなどを含めた自由討議を行っていただきました。

※自由討議の中で出た意見を以下のとおり概要をまとめました。

協働宣言に期待すること

- ・ 厳しい時代の中で、それぞれが欲しいもの、必要とするもの、変えていくものなどをいかに実行していけるか。
- ・ 「暮らしやすい」、「安全安心」、「楽しく暮らせる」という3つが協働宣言に期待するものではないか。
- ・ 瑞穂町が大好きな人が増えると良い。

- ・ 私たちの町は良い町だということを様々な形で知ってもらうのも協働を進める上で重要ではないか。
- ・ 町を知ってもらいたい。

瑞穂町の環境・特徴

- ・ 瑞穂町は国道16号や新青梅街道などが繋がっており場所的には良いので、これから何かを始めるには面白いのでは。しかし、瑞穂町に何かあるかといったら特にない。
- ・ 瑞穂町は酪農や農業が盛んで環境が素晴らしい。
- ・ 瑞穂町は端から端まで車で飛ばせば20分ぐらいで行ってしまう。全部見ることができる瑞穂町は楽しいと思う。
- ・ 3万5千人はやりやすい土地だと思う。
- ・ 町の規模などを考えると皆が少し動いたらとても良い町になるのではという期待がある。
- ・ 瑞穂町はどちらかというと畑の方が多く、今後人口を増やすのも難しいのではないか。

考え方・意見

- ・ この会議は、始めから到達点を決めて進めるのではなく、様々な意見をまとめていくことが重要である。
- ・ (社協のサロン活動を例に) 住民一人ひとりが抱えていること、考えていることに耳を傾け、役場の人にも知っていただくことが協働をしていく上で重要である。
- ・ 積極的に自分ができることを言えるような町づくりをしていったら良いのでは。
- ・ 小さい悩みを大勢の所で言えなくても、小さな所では自分の意見をいえるような部分が、少しずつ増えていくような種蒔きが必要ではないか。
- ・ 作業所などでも、1分しか作業をできない人、1日できる人、毎日できる人など様々な人がいる。協働ということを言う前に、様々な立場で様々な人がいて、できる人できない人がいる中で作っていかねばならないことをしっかり伝えていく必要がある。
- ・ 口コミで人に伝わっていくことがある。サロン活動に参加して良いと思ったことを自分の地域に帰り、それが少しずつ膨らみ、少しずつサロン活動に参加する人が増えているのを見ると、口コミで広まっていくのも重要である。

ボランティア

- ・ ボランティアも本当に好きでやっている人が多い。無償でも構わないという人がやっているが、難しい問題にぶつかると役場に投げたしまい、本当のことができないことがある。そのため住民も少し勉強しなければならない。
- ・ 住民は無償、職員は有償で働いている。

- ・ 行政の仕事に住民が関わるとボランティアと感じてしまう。
- ・ ボランティアする場が必要である。
- ・ ボランティアの定義を考えた場合、有償無償があり、皆思っていることがそれぞれ違うと思う。無償で頑張っているからある部分では責任も無いとなってしまうのであれば、協働を考える上でボランティアの位置付けはどうなのか。ボランティアという言葉なしで協働を考えることもできないと思う。協働はボランティアと関係あるのか、またどういうボランティアが関係あるのかなど定義がないとイメージしづらいと思う。
- ・ ボランティアは専門家でなければならないと考える。だから勉強しなければならない。責任もあると思う。できる、できないは別にして、プロ意識を持つことが重要ではないか。
- ・ 最後まで事業に対して繋ぎとめてくれるボランティアと手が空いたときにしか関わらないボランティアを分けて考えないと、主になってやっている人が嫌になってしまう。
- ・ 本当に一生懸命にやっている人が嫌になってしまうような組織・活動になってはならないと思う。
- ・ (クリスマスイルミネーションを例に) 町外から来た人は気軽に手伝うと言ってくれる。一方、もともと瑞穂にいる方は少しシャイというか、本当にこれはうまくいくのとかどうなるか分からないものについては、少し慎重である。

人材 (ボランティア以外)

- ・ うまく住民と行政の間を取り持つような人 (コーディネーター) がいてくれたら話もまとまっていくのではないか。
- ・ 地元だけではなく、他所から人や意見を入れても良いのではないか。
- ・ (ボランティアで行っているサイクリングを例に) 人や時間の軸をどう繋げていくかが重要である。歴史と現在と未来を繋げる活動をすることは人が繋がっていくことである。人を動かすにはシステムも必要だが、一番は伝える人、引っ張れる人、バランスよく調整できる人を作っていくことである。

意識

- ・ 行政、住民がそれぞれできることをうまく連携していく中で、行政がやらなければならないこととは別に、どこがやるのか分からないことを自分達でやろうという気持ちを持つことが協働の一步ではないか。
- ・ お互いにやっ払いこう、役場と情報を共有してやっ払いこうということが大事ではないか。
- ・ 宣言を出しても、参加する人は少人数で反対意見も絶対多いと思うが、それを押し通していかないと広がらないと思う。やっ払いこうと決めたらそれをやっ払いいくしかない。

- ・ 町民意識調査の調査結果で「行政と町民の役割～行いたい行動」という項目のトップは、「自立自助の意識を持つ」であった。そこからうまく繋がっていくのではないか。
- ・ 危機感とか自分達がやらなければならないという当事者意識が全くない。
- ・ 浸透するのに5年、10年はかかると思う。
- ・ 町全体が住みよい町になって協働という意識を持った住民が出てくるには日を要する。
- ・ 残業代がつかない夜の会議であるとか、休日の行事にほとんど出てこないといった中で職員は協働と言っている。協働と言っている人が役場にいないときに住民として協働のことをほとんど行っておらず、ただ自分の仕事が楽になるために協働だと言っている職員が多いのではないか。
- ・ 町外から来た人が町のことをよく分からないというのは町のPR下手である。
- ・ 地域に入っていない職員もいるので、意識を変えていくべきである。

きっかけ

- ・ 一人ひとりに言っても立ち上がる人は少ないと思うが、「楽しそうなのでやってみようかな」というのが最初だと思う。
- ・ まずはきっかけ作りで、そこから広げていくことが重要なのでは。
- ・ (NHKの連続テレビ小説「あまちゃん」を例に) ちょっとしたきっかけで周りを巻き込んで地域が活性化していき、最終的に町が大好きになっていく。
- ・ 自分もやってみようかなと思う人が出たら芽が出てくる可能性もある。何もやらなかったら中々1歩が出ない。その1歩も、ある程度瑞穂町を他所から見ることができるとできる人があることなのかもしれない。

取組みなど

- ・ 町外から瑞穂町に来た人たちは役場の中や自治会への入りづらさがあるので、町が行っていることや大変なこと、町の人に手伝って欲しいことを分かりやすく具体的に解説し、理解を得られればよいのではないか。
- ・ 役場と一般の方の情報共有が重要である。
- ・ (防災訓練を例に) 様々な壁を取り払い、様々な状況でできることが協働への近道では。
- ・ 瑞穂町で生まれ育った子は様々なことを知っていて、すごく話をしてくれる。他所から来た子どもと瑞穂町で生まれ育った子どもは生きてきた時間は一緒でも瑞穂町で過ごした歴史が全く違っていると感ずるので、そこをフラットにできれば良い。
- ・ 他所から瑞穂町に来てもらうのが良い。
- ・ 行政と住民が一緒になって町のこと、協働のことを考えるときに何かテーマを決めたものを2、3個作り上げる必要があるのでは。

- ・ 協働宣言を出しても、「ボランティアだから自分は関係ない」と思われてしまわないよう、協働宣言の次に行うものを作っていく必要がある。
- ・ 自分たちができないことにお金を払って行政にやってもらうということが染み付いているので、そうではないということを早い段階で分かってもらえるような場や仕掛けが必要ではないか。
- ・ 様々な世帯や人がいるので、そこでグループ形成されているところから影響力のある人を巻き込み、「皆で参加していこう」と広げてもらう方が早いと思う。その人たちに分かりやすく説明するとか、何か機会を持つとか、もっと浸透させるには、様々な世代や括りをまとめているような人を取り込んでいければよい。
- ・ 農業振興地域であるとか農地の集約化だとかあるいは宅地化が進んでいる場所の農業のやりにくさとか農業の部分でもさまざまな考えが出てくる。瑞穂町の農業振興地域の割合は他所と比べて多いのか少ないのかなど解決できればという部分がある。
- ・ どのように分担し、それぞれの興味であるとか、どれだけ手分けしながら関わっていけるかという視点を持つても良いのではないか。
- ・ 自助、共助、公助のバランスである。自分を助けるところ、周りで助け合うところ、行政との関わり方や順序などバランスを考える必要がある。バランスがよければ自助、共助、公助がうまくいくのではないか。
- ・ 住民提案型協働事業は、社会教育課の事業で教育委員会の会議で提案される。住民がやりたい事業について会場の提供、PRの広報掲載、若干の謝金もあり、協働の一形態ではないか。
- ・ 協働を浸透させるには時間がかかると思うが、やっていく上では瞬発力が要求される。瞬間的に人に伝えるもの、それと長期的なものを作るべきと思う。雑木林、里山づくりの再生活動をしている中、長期的にやるものが素晴らしいがなかなか人には伝わらない。そのため、そのときに完結するストーリー性のあるものを作るのが良い。
- ・ あちこちで少しずつ種を蒔き、そこから少しずつ増えていくようなやり方もあるのではないか。
- ・ (町の回廊計画の回廊ルートを例に) 町内を皆で歩くと様々な意見が出る。シンプルなことだが、瑞穂町の良いところを見ながら歩いてみるのも良い。
- ・ 町は内部のことをさらけ出していく必要がある。
- ・ 財政が厳しい中、仕事の押し付けをするような協働にしてはならない。
- ・ 自分の課題は自分またはその家族がやるべきで、それをできない人が地域やNPOにお願いし、そこでできないものが役所や国が行うという原則のもと、協働ができていくのではないか。
- ・ 住民の方がやる気を出していただいて、行政は自分達から外へ出て行くような意識付けをしていかないとお互いが離れたままであると協働はできないのではないか。

- ・ 行政も構成員の方やそれ以外の方に情報を出したり受けたりと、様々な部分でオープンにしていければ良い。

その他

特にありませんでした。